新刊紹介

ジョゼフ・コンラッド『闇の奥』

高見 浩 訳　新潮文庫、2022 年、248 頁

川上 純子

本書はジョゼフ・コンラッドの作品のなかで最も有名にしてさまざまな議論の対象となってきた中篇小説 ‘Heart of Darkness’ の新訳である。

‘Heart of Darkness’ は 1899 年に *Blackwood's Magazine* に 3 部に分けて掲載され、1902 年に William Blackwood and Sons より出版された単行本 *Youth: A Narrative and Two Other Stories* に収録されたが、初の日本語訳は約半世紀を経てのことで、既訳を列挙すると、中野好夫訳『闇の奥』(『新世界文学全集 7』河出書房、1940／岩波文庫、1958)、岩清水由美子訳『闇の奥』(近代文芸社、2001)、藤本茂訳『闇の奥』(三交社、2006)、黒原敏行訳『闇の奥』(光文社古典新訳文庫、2009) と続き、高見浩訳が 5 つめとなる。

‘Heart of Darkness’は、欧米の大学では人文学専攻の学生でなくとも一度も読まずに卒業を迎えることは不可能と言われるほどの必読作品だ。一方で、英語ネイティブの学生からも「一読しただけではよくわからなかった」という声がしばしば聞かれる。理由はいくつかあるが、中野好夫の表現を借りれば、文体の「象徴的な雄勁さと簡潔さ」もその一つだ。

小説中のマーロウの体験談は、ベルギー国王レオポルド 2 世が私領「コンゴ自由国」において展開した苛烈な植民地支配を目撃した、船乗り時代のコンラッド自身の体験をもとにしている。しかし、「ベルギー」や「コンゴ」はもちろん、ごく一部を除き具体的な地名はほとんど登場しない。人名もしかりで、固有名の有無が物語内における位置づけを暗示する仕掛けになっている。固有名の代わりに用いられる象徴表現は、当然ながら二重、三重の響きを持つ。読者は意味の奥行きや重層性、アイロニーを常に意識しながら読むことが求められる。

マーロウの旅程についても、具体的な日付が示されないため、読者の客観的な時間把握が大きく制限されており、旅の行程が捉えづらい。時の経

過については、せいぜい〇日目、〇ヵ月目、翌日といった表現がある程度で、他は潮の干満や日の光の変化によって伝えられる。印象主義的とも言われるこれらの表現は、マーロウが知覚した情報（印象）である。ゆえに、物語内時間の把握において、読者はマーロウの語りに強く支配されることになる。

さらに、小説の中にマーロウの語りがあるという構造を持ちながら、その語りがところどころで途切れ、著者の声も響く点も厄介だ。読者は著者の語りの中にあるマーロウの語りという入れ子構造の語りがもたらす重層的な声に耳を傾け、コンゴの密林の奥とテムズ河の上を瞬時にして行き来しなければならない。

他にも、先行する文学作品（ダンテ『神曲』など）への言及など、コンラッドが作品内に取り入れた多彩な要素により、細心の注意を払わないとぼんやりとした読解に終わりやすい。本作品を文学史上の傑作としている要素のすべてが読解への負荷となると同時に、翻訳の難しさにも直結する。

ここで一旦、既訳について振り返っておきたい。英米文学翻訳の泰斗である中野の訳文は闊達にして格調高いが、‘Heart of Darkness’ が植民地支配の陰惨な実情を伝えていることに対する認識と理解が十分ではなかったという評価がある。解説に植民地支配への言及がまったくないことや、「白い墓のような都市（ブリュッセル）」にパリと註記するといったいくつかの明らかな誤訳を見れば、的外れな批判ではないだろう。

岩清水訳はこうした点への気づきとともに、中野訳の言葉遣いが今となっては古めかしく響き、現代の読者に伝わりにくいことを契機として、小説の声の大部分がマーロウの語りであることを意識し、「分かり易く自然な言葉」でこの小説を翻訳している。

藤永訳は中野訳の歴史への眼差しの乏しさを非常に強く意識しており、訳文にはこの点を厳しく指摘する註が細かくつけられている。

黒原訳は古典作品を「いま、息をしている言葉で」[1] 新訳し、より多くの読者に届けるという目標を掲げる光文社古典新訳文庫シリーズの 1 作品として出版された。訳者は、「訳者あとがき」において、少なくない箇所に

[1] 「光文社古典新訳文庫について」https://www.kotensinyaku.jp/about/

ついて「『闇の奥』が意図的に曖昧な表現法をとっている」[2] と認識し、読者が把握しづらいだろうと思われる部分には積極的に言葉を補ったと述べている。また、特に翻訳が飛躍していると受け取られかねない部分については、具体的に解説も付している。一方で、読みやすさのために長い段落を分けてもいる。[3] この点については、段落の長さはマーロウが自らの語りと回想に没入し、息をするのも惜しむかのように語っていることを伝えていると考えるならば、評価の分かれる部分ではないだろうか。

さて、'Heart of Darkness' の日本語訳の最後尾に加わったのが、高見訳である。訳者は多数のミステリー作品やヘミングウェイの諸作品、そしてトマス・ハリスのベストセラー『ハンニバル』シリーズの翻訳で知られる著名なベテラン翻訳家である。平易で簡潔な文体で知られるヘミングウェイの訳者が、前述したように平易さとは程遠い文体を特徴とするコンラッドの作品、しかも『闇の奥』という「問題作」を訳した点は興味深い。

高見訳は中野訳、黒原訳に続く 3 つめの文庫での出版であり、一般読者にとっての読みやすさが相当に意識されていると感じられる。同時に、段落の扱いは原作に忠実であり、言葉を補うことも控えめだ。また、本文への注は 46 箇所と決して多くなく、ヨーロッパやコンゴの当時の事情、他の文学作品との関連性など、必要最小限に絞られている。

訳語についてはどうだろうか。当然のことながら、後発訳は先行訳を参照できる立場にある。そこでまず、'Heart of Darkness'の訳者たちを悩ませてきたいくつかの表現が、過去の翻訳と高見訳においてどのように扱われているかを少し確認しておきたい。

まず、wilderness だ。'Heart of Darkness'において描かれるコンゴの wilderness は人間を圧倒する環境である。中野訳では「荒野」としていたが、日本語における「荒野」に、コンゴに限らず熱帯の密林を思い浮かべる人はあまりいないだろう。wilderness は「手つかずの自然」「未開の自然」といった意味合いだが、原語が 1 語であるのに対し、修飾語を伴う訳語はもたつく。黒原訳はより強い意味を求めて「魔境」という大胆な訳語を採用

[2] ジョゼフ・コンラッド『闇の奥』黒原敏行訳、光文社古典新訳文庫、223

[3] 例えば、前掲書、50-52

していた。高見訳は「荒野」や「原始の大密林」など、文脈に合わせて柔軟に訳出している。

‘Heart of Darkness’の中で最も有名な、クルツの臨終の言葉、“The horror, the horror!” はおそらく訳者にとって最大の難所の一つだろう。岩清水訳が「恐い！　恐いよ！」、黒原訳が「怖ろしい！ 怖ろしい！」としている一方、藤永訳と高見訳は、中野訳の「地獄だ！ 地獄だ！」を踏襲している。“The horror, the horror!” の解釈は今もさまざまに分かれているが、母親が half-English、父親が half-French であり、ブリュッセル在住の女性と婚約し、ベルギー王国支配下のコンゴというフランス語圏で生涯を終えたクルツの母語がフランス語寄りであった可能性は小さくないと推測すれば、「恐い」「怖ろしい」というニュアンスだけでなく、怒りと諦めと悔いとやるせなさも入り混じったフランス語の感嘆表現 “*Horreur!*” に通じている可能性もあろう。そう考えると、「地獄だ！ 地獄だ！」はやはり秀逸な訳だと改めて感じられる。

さて、高見訳の巻末には、「〈闇〉の奥にひそむもの——解説に代えて」と題した、通常の「訳者あとがき」を大きく上回る頁を割いたテクストが添えられており、著者コンラッドの人生や本作品の成立過程の概要を提示している。このテクストからは、訳者がどのようなスタンスで翻訳に臨んだかがうかがえる。

3 部立てのテクストは、「1 発端」がコンラッドの人生の前半の紹介となっており、船乗りコンラッドがコンゴから戻った 1891 年で筆を止める。

「2 発酵」では、コンゴ体験から‘Heart of Darkness’の執筆にとりかかるまでの 9 年間を扱っている。船乗りから作家への転身の経緯を追いながら、コンゴ体験という題材はなぜ 9 年という歳月をかけて作家の中で醸成されなければならなかったのかを、英国に定住し結婚したコンラッドの私生活の変化と当時の社会情勢を踏まえて紹介する。

「3 結実」においては、‘Heart of Darkness’という作品を論じる。柱は 2 つあり、1 つは作品から読み解くコンラッドの植民地支配に対する批判的態度への肯定的な評価だ。訳者は「“コンラッド・ワールド”の新たなガイドというべき」(220) マヤ・ジャサノフの *The Dawn Watch* (Penguin, 2017)

を参照したという。そして、9 年の間にコンゴの実態に対する糾弾運動や報道が徐々に広がるなか、そうした運動において大きな役割を果たした外交官ロジャー・ケイスメントとの個人的な交流を通して、コンラッドは「植民地主義の悪を再認識し、まずはその“闇”のヴェールを剥がさずにはいられなかったのだろう」(228) と述べる。[4] この点で、アチェベの痛烈な批判以降、半世紀近くにわたり「人種差別主義者」のレッテルを貼られてきたコンラッドを anti-imperialist として再評価する態度を訳者は取っており、ジャサノフの影響が見られる。

一方で訳者は、コンラッドが「現代的な意味での徹底的な反植民地主義思想」(228) の持ち主ではない、という留保もつける。そして、大英帝国の国籍を苦労して取得したコンラッドもまた「“時代の子”だったのだと言ったら寛容にすぎるだろうか」(229) と述べる。さらに、「コンラッドの真面目(しんめんぼく)は、植民地主義の“闇”を見すえながら、その奥に透けている人間存在の“核心”をも凝視したところにあるだろう」(229) と回収していく点は、ジャサノフを批判した従来のコンラッド批評に与する立場にも見える。[5]

一見矛盾する主張が併記されているようにも見えなくもない。だが、‘Heart of Darkness’ をめぐって多様な視点や評価が混在する事実を、どちらかに強く肩入れすることなく紹介している点は、幅広い読者に向けた文庫という形態を考えれば、解釈を押し付けていないという点で肯定的に受け止められよう。

「3 結実」の 2 つの柱のもう 1 つは、「〈自然対人間〉という永遠のテーマ」(233) への言及だ。コンゴの密林で「自然を冒涜して跳ね返される人間の愚」(233) を象徴的表現を駆使して鋭く深く描いているという点は、地球環境に喫緊の課題が山積し、人新世をめぐる議論が高まる現代の読者に提示するにあたって、たしかに締めくくりに置いて強調すべきだろう。

---

[4] Maya Jasanoff, *The Dawn Watch: Joseph Conrad in a Global World*, William Collins, 2018, 213.

[5] 例えば、Keith Carabine, https://www.josephconradsociety.org/reviews/keith-jasanoff.pdf なお、この点については、次の書評を参照した。山本薫「新刊紹介 Maya Jasanoff 著 *The Dawn Watch: Joseph Conrad in a Global World*」『コンラッド研究』10 号、2019

また、「コンラッドの生涯とその時代」という副題のついた年譜も添えられ、コンラッドの生涯に起こった出来事のほか、欧米社会の動向や重要な文学作品の刊行、そして日本社会の動向や日本の重要文学作品の刊行も併記されている。これにより、日本人の読者も、ジャサノフの表現を借りれば、「グローバル化した社会の one of us として」のコンラッドの生涯を捉えることができる。

このように、高見訳は、先行訳を踏まえた読みやすい訳、コンパクトな注、厚みのある解説、詳しい年譜が揃っており、一般読者が‘Heart of Darkness’ のテクストとそのコンテクストを把握しやすい、親切な設計になっている。前述のジャサノフの著書が大きな反響を読んだことから、欧米では ‘Heart of Darkness’やコンラッドの他の作品への関心が新たな広がりを見せているといわれるが、この翻訳は日本語圏においてそうした期待に応えることを目指しているようだ。

ヴァルター・ベンヤミンは「翻訳者の使命」において、翻訳は原作の中に宿る「存(ながら)える生」[6] に由来するものだと指摘し、「翻訳者の使命は、翻訳の言語への志向、翻訳の言語のなかに原作の谺(こだま)を呼び覚ますあの志向を見出すことにある」[7] と述べた。5 つの日本語訳が入手可能となった今、それらを読み比べることで、それぞれに趣のある「谺」に耳を澄ませ、‘Heart of Darkness’ に宿る「存える生」をこれまで以上に豊かに受け止められる機会が生まれているように思われる。

（かわかみ じゅんこ　　多摩美術大学　講師）

[6] ヴァルター・ベンヤミン「翻訳者の使命」（内村博信訳『ベンヤミン・コレクション 2 エッセイの思想』、ちくま学芸文庫、1996）391。
[7] 前掲書、401